

【研究ノート】

企画展「子・財・壽」制作に参加して

学芸員 松岡 徹

はじめに

愛知大学記念館で2022年5月から開催された企画展「子・財・壽—中国年画が語る民国期の庶民の願い」の制作に参加・協力した。記念館には東亜同文書院大学記念センター展示室が設けられ、愛知大学の礎となった東亜同文書院（中国・上海）関係の貴重な資料が展示されている。

東亜同文書院の活動期は中華民国の時代と重なる。企画展は、①民国当時の同文書院生が生活を送る中で見たであろう、春節に飾られる年画を間近に見る機会を提供する、②纏足（てんそく）や民具などを通じて庶民の生活に触れてもらう—ことを目的とした。大学記念館の展示として意義深いものと考え。本稿では、展示という観点から資料保存との兼ね合いや、限られた条件下における展示の方法について考えてみたい。

I 保存と展示の兼ね合い

収蔵資料を展示する際、学芸員として留意しなければならないのは、資料の保存と展示（教育普及活動）との両立を図ることである。

企画展の中心となる木版年画は、青や赤などのインクを用いた多色刷りであり、照明器具の光や外光を受けると退色や変色を引き起こし、資料の劣化を招くという問題を抱えている。

一般に、博物館に展示される資料に影響を及ぼす要因には、温湿度や光、空気汚染、カビ、文化財害虫などがあり、資料を取り巻く環境を適切に維持・管理することが重要になる。

温湿度は、カビの発生や結露を防止するため、空調設備によって気温 20℃前後、相対湿度 60%未満を保つ。光は資料にとって大敵であり、外光の侵入を遮断し、室内照明は紫外線・赤外線を発生させないようにする必要がある。カビはもちろん、ゴキブリやシバンムシなどの害虫は資料を汚損するため、発生や侵入を防ぐことも重要になる。

企画展を開催した展示室は、3面が壁になっており、建物外部に接した1面に大きな窓2カ所が設けられていた。室内の空調は、壁の上部に設置された普通の冷暖房設備で行われる。天井に設置された蛍光灯8基には、いずれも紫外線を発生させる普通の蛍光管が使用されていた。記念館自体が国の登録有形文化財に指定されているため、室内の加工、資料や解説パネルの壁面への貼り付け、鋏止めは困難であった。

天井と壁を区切る廻り縁には展示資料を吊り下げるためのピクチャーレールが張り巡らされ、一応、展示を想定した造作が施されていたが、光への対応をどうするかが課題となった。

II 展示制作の基本方針

展示を企画する段階で、①外部の業者に委託できないため、手作り展示を旨とする、②多色刷りの木版年画が多く、劣化防止のため紫外線を発生させない蛍光管に交換する、③既存のピクチャーレールや記念館が保有する展示ケース、展示台、ポスターフレーム、イーゼルを借用し、新たな展示用具は購入しない、④展示制作に使用する細かい部材や工具などは自前で用意する—ことを基本方針とした。

蛍光管は計 16 本必要であり、いずれも展示期間中、紫外線防止膜付蛍光管と交換して使用することとした。手元の照度計で計測した結果、従来の蛍光管を用いた場合の照度は 590lx (ルクス) あったが、紫外線防止膜付蛍光管は 280lx であった。

文化庁は、国宝・重要文化財の照度基準を、①絵画、古文書などは 100lx 以下、②染織品は 80lx 以下、③版画は 50lx 以下と定めている⁽¹⁾。国際博物館会議 (ICOM) は、①油彩画、テンペラ画、木製品などは 150~180lx、②水彩画、染色品、写本などは 50lx と規定している⁽²⁾。

展示室で得られた値は、これらを上回っていて問題ではあるが、蛍光管を交換するだけでも照度を下げることができた。大きな窓 2 カ所には厚手のカーテンが備えられていたため、カーテンを閉じて外光を遮断した。

III 展示の制作

1 最大の魅力は実物

展示は、一定のテーマの下、テーマに関連する資料を配列し、企画側の訴えたいメッセージを展示資料および解説文 (資料のキ

ャプションを含む) を通じ、入館者に確実に伝える活動である。資料を間近に観察することによって、新たな発見や気づきを得てもらうとともに、自分の知識や経験に新たな知見を加えることの喜びを見いだしてもらうことが目的となる。

今回の企画展は多くの年画と民具を展示した。最大の魅力は、中国で印刷された年画、中国で使用されてきた纏足や民具など、いずれも実物・現物であることである。実物・現物であるが故に、一方で保存と展示の相克が激しくなるのである。

2 ストーリー展開

実物資料を、いかに理解しやすく配列するか。展示は資料の陳列ではない。資料が発信する情報を確実に伝えるため、「子・財・壽—中国年画が語る民国期の庶民に願い」の大テーマの下、いくつかの小テーマを設定し、室内をそれぞれのゾーンに分けることとした。入館者がゾーンを巡ることで大テーマの全体像を把握してもらうように構成した (図 1)。

中国における主な年画生産地をエピローグに、小テーマを設けた。具体的には、①門神、②天神、③吉祥 (福・禄・財)、④春節 (庶民の願い)、⑤祖先図 (母屋の居間)、⑥吉祥 (子)・嫁入り道具・女紅 (女性の手仕事)、⑦美女 (美少女鏡)、⑧紙馬 (葬式の衣装と供物) の順に配列して人々の生活と生涯に即したストーリーを展開し、プロローグとして戯曲・小説・時事に関する年画で締めくくった。

廊下の展示ケースには、実際に使われた纏足と泥人形 (座虎と十二支) を收容した。全体の展示は、エピローグとプロローグ、纏

足、泥人形を合わせ計 12 のパートに分かれた。

3 再現

民俗資料の展示では、資料がどのように使われていたかを再現することも大切になる。中国における年画の実際を示す写真を掲示するとともに、祖先図の周辺には椅子とテーブルを配置した（写真 1）。

女性のコーナーは、嫁入り道具やベッド、化粧箱、産湯に使う桶、ゆりかごなどを用いて当時の様子を再現した（写真 2）。

展示手法には、壁を用いる壁面展示、展示台に資料を並べる露出展示、貴重な資料を観察できる展示ケースなどがある。壁面展示は、絵画や掛け軸などのほか、日本の民俗系博物館では昔の大工道具などを並べるなど、実物資料を直接観察できるというメリットがある。展示台に資料を直接配列する露出展示も同様の利点がある。ガラス越しに資料を観察する展示ケースは、古文書や絵巻物など外気に触れさせない貴重な資料に向いている。

企画展では、それらを組み合わせ、理解の促進に役立ててもらおうこととした。

4 手作りの展示

手作り展示を旨としたことから、ピックアップレールや展示ケース、展示台、イーゼルを最大限活用すると同時に展示具を工夫した。

壁面に直接貼ることができなかったことから、ポスターフレームを多用した。多くの年画を展示するため、ポスターフレームに吊り金具のヒートンを取り付け、複数の年画を収容したポスターフレームを縦に 2~3

枚連結して吊り下げる方法をとった（写真 3）。

ポスターフレームの最上部に「門神」や「天神」など、小テーマの主題を A5 判の厚手用紙に印刷し、両面テープで貼り付けて掲示した。

小テーマに関する解説は、A5 判に印刷し、アクリル製の L 型カード立てを利用した。展示台に置かれた個々の資料のキャプションは、名刺サイズに印刷し、アクリル製 L 字型カード立てに入れて示した。

壁に掲げた婚礼用の紅の垂れ幕と死者に掛ける黄色の布団は、中国における色遣いを実感できる貴重な資料である。いずれも、重さに耐える直径 15mm の木製丸棒を加工し、両端にヒートンを取り付け、ピックアップレールのフックに掛けた。展示台には生活用具や葬儀用の冥銭などの供物を並べた。

纏足と泥人形を収容した展示ケースは、外光が差し込む廊下に設置したが、年画に比べて光の影響が少ないと考えた。

展示室入口の扉に窓ガラスがあったことから、企画展全体の趣旨と概要を A4 判 2 枚に印刷し、ガラス面に貼り付けた。

5 チラシとポスター

企画展のチラシは表裏の 1 枚構成で作成し、表面をポスターに転用した。チラシはホームページにも掲載され、企画展の開催と内容を広く知らせるために欠かせないツールである。「チラシミュージアム」の標題で、全国各地の博物館・美術館の展示会を集成したアプリが存在する時代であり、インターネットを通じた情報発信が必須になっている。

チラシは、展示された年画の個々の解説

文とともに綴じ合わせ、展示室入口に置き、自由に取ってもらうようにした。入館者は、手にしたチラシで概要を把握し、年画とチラシに添付された解説を照らし合わせることで、年画の意味や由来を理解できるようにした。

IV アンケート

博物館や美術館で実施される入館者アンケートは、展示の感想や満足度を尋ねる質問が中心であり、展示の改善点を見だし、次回以降の展示に生かすことを最大の目的としている。企業活動におけるマーケティングと同じである。

今回用意した質問項目は、①来館の目的（主目的が常設展か企画展かなど）、②満足度、③お気に入りの資料、④企画展を知った経緯、⑤来館者の年齢層と居住地一であった。

6月中旬の時点で集まった回答16件を分析した。年齢層別では10代と20代が69%を占めた。多くは学生と思われる。50～60代が31%であった。来館の目的では、「企画展をみるため」との答えが50%を占め、「学校などの教育の一環として」が44%、「常設展と企画展をみるため」、「たまたま来たので」と続いた。企画展を知ったのは、「人に聞いて」が69%と最も多く、次に「愛知大学記念館ホームページ」、「愛知大学記念館に来たとき」であった。展示の満足度では、「非常に満足」が62.5%、「満足」が37.5%で、2つを合わせると100%となり、「どちらともいえない」、「不満」、「非常に不満」はゼロであった。

満足した理由（自由記入）は、「生活などが分かる」、「実際に使われたものを間近に

見ることができた」、「不思議な世界観に惹かれた」、「今まで見たことのない展示物が見られた」などの声が寄せられた。回答からは、子どもが描かれた年画や門神、祖先図、葬儀用具、纏足に高い関心が示された。纏足は「清朝で、このような靴を本当に履いていたと思うと、ゾッとした」との感想もあった。全体の展示に関し、「説明が、もう少し欲しかった」との答えがあった。

V 基礎となるデータ

ここで、展示にこぎ着けるまでに行わなければならない資料の基本的なデータ収集について触れてみたい。すなわち、資料台帳の作成である。博物館では、収集した資料を調査し、台帳に登録する作業から始まる。資料によって、求められる情報が異なることから博物館・美術館はそれぞれの資料に応じて独自に台帳形式を整えている。

資料の調査は、①個々の資料に登録番号と名称を与える、②資料を実測し、図を描くとともに写真を撮影する、③資料台帳の各項目に記載する、④資料に対する調査研究によって得られた成果を記載する一などの作業を通じ、資料台帳に集約する。資料台帳を作成することによって資料の具体的内容を把握できるようになり、その後の企画展や調査研究に役立てることができるようになる。

企画展で用いた年画や民具を含め、収蔵資料は800点以上に上った。資料の調査は、一点一点、縦横の長さなどの実測値や形状をノートに記録した上で写真撮影を行った。調査台帳は独自に作成し、A4判1枚に表形式で表すこととした。記入する項目は、①資料番号、②名称、③用途・種類、④民族・地

域、⑤年代、⑥法量・材質、⑦収集時期・場所、⑧資料に関する情報などを左欄に設け、右欄は写真や図解を配置するスペースとした。「資料に関する情報」の欄は、資料に関する調査研究の成果などを書き込めるようにした。

VI 課題と展望

企画展に用いたのは、年画のほか祖先図とそれに伴う机や椅子、嫁入り道具など女性に絡む数々の資料、葬儀用具、纏足、泥人形と多種多様な資料群であった。

民国期の庶民の生活を、さまざまな視点から理解してもらおう効果を狙ったが、スペースに比べて非常に多くの資料が並ぶ結果となり、入館者が資料から得られる情報量が多すぎたのではないかと思われた。狭い展示室に資料を詰め込みすぎた感があり、一部の資料を別の部屋か別の機会に展示する方法があったかもしれない。課題として受け止めたい。

アンケートの回答に、「もう少し説明が欲しかった」との意見があった。「門神」、「吉祥」などの小テーマは、主題名を掲示したものの具体的な内容の解説文(200字程度)が付されていなかったため、入館者には分か

りづらかったかもしれない。改善点としたい。

今回の企画展は、民国期の民衆が、国家という「大きな物語」を離れ、日常の生活や春節という祝祭の際に願いを込めた年画を中心に展開した。ただ、年画は民衆の風俗習慣を構成する一つの要素にすぎない。中国は56の民族から構成され、それぞれの民族にはそれぞれ異なる風俗習慣が存在する。中国という「多民族国家」を理解するためには、民族の基礎となる言語、文字、衣装、民具、生活習慣、祭祀などを知ることが必要になる。

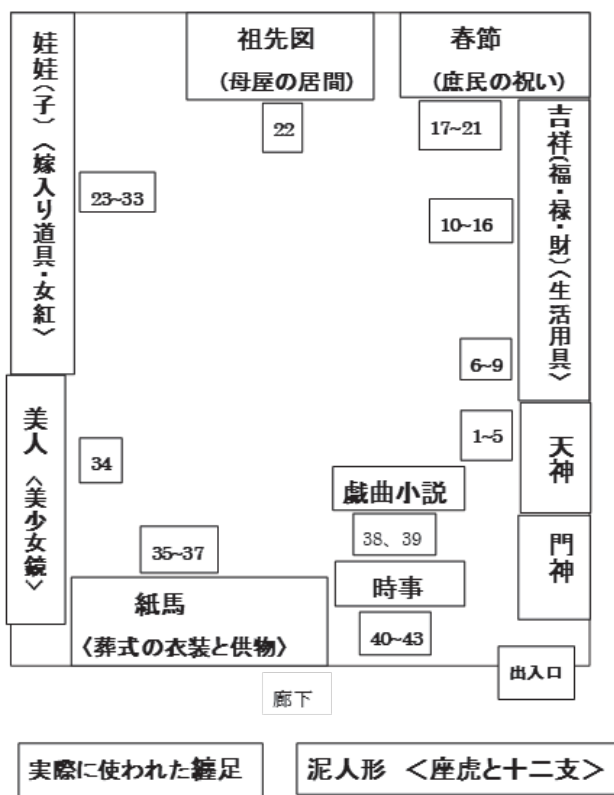
それら多くの資料を展示空間に展開することができれば、より一層、相互理解が深まり、教育的効果も高まると考える。年画をきっかけに、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの設立趣旨の下、時機を変え、展示手法を工夫しながら、他の民俗資料を展開することが今後の課題となる。

なお、企画展の実施に当たっては、展示室の確保や資機材の提供、ホームページでの告知など、さまざまな面で記念館側が大変お世話になった。深く感謝申し上げたい。

(2022年6月16日)

(2) 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 (2011)『文化財の保存環境』中央公論美術出版、46頁。

(1) 文化庁長官裁定「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要綱」(2018年10月1日改訂)文化庁ホームページ
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shoninshisetsu/pdf/93702201_06.pdf



(注) 図中の数字は、「年画一覽」資料に記載の年画番号

図1 展示の構造と配置



写真1 祖先図の資料配置



写真2 女性の部屋



写真3 連結されたフレーム